

幼児における自己主張行動の発達の研究

—3～4 歳児の縦断的観察からの検討—

広島修道大学 鈴木 亜由美

Developmental research of self-assertion in young children using longitudinal observations of three - and four- year- olds

Hiroshima Shudo University SUZUKI, Ayumi

要 約

本研究は、幼児の自己主張行動の発達の特徴を縦断的観察により検討するものである。保育園の1クラスにおいて、3歳の時点と4歳の時点の2回にわたって自由遊び場面を中心に自然観察を行い、収集されたエピソードを、自己主張行動が生起する状況、自己主張行動の形態、それに対する相手の反応、の3点から分析した。その結果、幼児の自己主張は、要求、拒否、抗議の3つに分類されることがわかった。また自己主張の形態については、行動を伴うか否かは3歳時点と4歳時点で差がないが、言語表現は4歳時点の方がより多様であり、特に間接的な表現を多く用いることがわかった。さらに相手の反応についても、4歳時点の方が主張者に対する拒否や抵抗の仕方が多様であり、結果的に自己主張的やりとりが継続しやすいことがわかった。

【キー・ワード】 幼児, 自己主張, 観察

Abstract

This study investigated the development of self-assertion in young children using longitudinal observations. Children's free play was observed twice: at ages three and four. Self-assertion episodes were collected by observation and analyzed from three points of view: situations in which self-assertion occurred, self-assertion patterns, and the responses of other children. The results showed three situations in which self-assertion occurred: requests, refusals, and protests. Although no clear age difference was found about the frequency of self-assertion with physical action, children showed more variations of expression at four years old than at three years old. In addition, the responders also exhibited a greater variety of refusal and resistance patterns when they were 4 year olds, so assertive interactions occurred.

【Key words】 young children, self-assertion, observation

問題と目的

幼児期になると子どもは仲間との対等な関係において、互いの要求のぶつかりあいを経験することによって、さまざまな社会的スキルを身につけていく。自己主張とは、「他人の権利を侵害することなく、個人の思考と感情を、敵対的でないしかたで表現できる能力」(Deluty, 1979; 濱口, 1994)と定義され、発達途上にある子どもが獲得すべき社会的スキルのひとつであるといえる。

幼児期の仲間関係における自己主張行動の研究は、主にものの所有などをめぐって生じるいざこざや葛藤場面において、子どもがどのような自己主張的解決方法をとるかという視点からの研究が盛んに行われてきた (Shantz, 1987 など)。

近年では、「砂遊びをしているときに友だちにスコップをとられたら、どうしますか?」というような仮想的な対人葛藤場面を用いて、子どもが自己報告する主張的方略を分析する研究が行われている。例えば、自己主張の形態に関して、山本(1995)は遊び道具をめぐる葛藤場面において、幼児がとる自己主張的解決方略を、身体攻撃、非言語的獲得、他者依存、説得・抗議、協調、向社会的、の6つに分類し、4~6歳の各年齢においてどのような方略が選択されるかを調べたところ、4歳児では身体攻撃などの非言語的で自己中心的な自己主張が多いのに対し、5、6歳児では説得・抗議などの言語的自己主張が多いことがわかった。

また、どのような状況で自己主張が生じやすいかという状況要因に関して、山本(1995)は、葛藤の相手として、「仲良しでない子」を想定したときには非言語的主張が用いられやすく、「いつも一緒に遊んでいる仲良しの子」を想定したときには言語的主張が用いられやすいことを示した。さらに丸山(山本) (1999) は、相手の敵意の有無と自己主張の方法の関連を検討しており、相手に敵意があるときには言語的主張が用いられやすく、敵意がないときには言語的主張と非主張的(消極的)方法のどちらもが用いられることを示した。

これらの研究は、幼児の仲間関係における自己主張行動について、多くの示唆をもたらすものであるが、一方で自己主張行動の発達を個人の認知能力や言語能力の問題と見なしており、自他の関係性の変化と見なす視点に欠けているという問題があった。乳児期の母子関係における自己主張行動を扱った研究では、自己主張を子どもの認知・言語能力の発達に還元するだけでなく、それを受け止める母親の存在を含めて分析する必要性が説かれており(坂上, 2002; 川田・塚田・城・川田, 2005)、子どもの自律性の増大と母親の対応のシステムの変化を示す研究が行われている。例えば、坂上(2002)は、15~27ヶ月の子どもの母親の葛藤的やりとりを縦断的に観察し、母親の非難・叱責、子の情動反応、母親の反応といった一連のやりとりがどのように変化するかを検討した結果、子どもの情動分化と理解力の発達、母親の対応変化のすべてが互いに影響を及ぼしあって母子のやりとりが相互調整的なものに再組織化されることを示した。

一方、幼児の仲間関係における自己主張の研究は、前述のようにその多くが自己主張の与え手の視点に立って行われているが、与え手と受け手を包括的に分析した研究もいくつか行われている。例えば、高濱(1995)は、仲間関係において一方的に自分の意思を通そうとする場面が多い自己主張タイプの5歳児2名について、遊びをめぐる葛藤に至らないやりとりの発達の变化を3回にわたる縦断的

観察から分析した。その結果、観察対象児については観察を重ねるごとに、相手に要求を拒否されたときにもさらなる説明や説得を行い、結果として交渉が成功するケースが多く見られるようになることがわかった。また、対象児の要求に対する相手の行動も、観察を重ねるごとに単なる拒否ではなく条件付きの受け入れや別案の提示が見られるようになり、交渉するスキルは対象児と相手の双方で変化することがわかった。

高濱（1995）は自己主張行動において言語的なものが主流になる5歳児を対象としていたが、それ以前の年齢の自己主張はどのようなものであろうか。仮想的対人葛藤場面を用いた研究では、前述のように3～4歳児の自己主張行動は身体攻撃などの非言語的で自己中心的な自己主張が多い（山本、1995）とされている。また、高坂（1996）は、幼稚園の年少クラスに所属する3歳児が、おもちゃを相手から遠ざける、おもちゃをしっかり握って離さないといった、行動方略が言語的主張方略と同じぐらいの頻度で見られることがわかった。

これらの結果から、子どもの仲間関係における初期の自己主張は行動を伴うものであり、徐々に言語のみによるものへと発達的に変化していくと考えられる。しかしながら、このような変化をもたらす発達のプロセスを縦断的にとらえるような研究はまだ十分に行われていない。

そこで本研究は、高濱（1995）を参考に、幼児のいざこざや葛藤に至らないやりとりを対象に、自己主張の与え手と受け手の双方に注目し、それらがどのように発達的に変化するかを明らかにする。観察対象年齢を自己主張の形態が身体攻撃などの非言語的で自己中心的なものから説得や抗議などの言語的なものへと次第に変化する3～4歳とし、縦断的な観察を行う。

方 法

観察対象児 広島市内の私立保育園において、観察開始時に3歳児クラスに在籍する20名（男児13名、女児7名）を対象とした。観察開始時の年齢範囲は、3歳2ヶ月～4歳1ヶ月であった。

この保育園は、0歳児クラスから5歳児クラスまで年齢別に1クラスずつがあり、多くの子どもが3歳児クラス進級以前から同じクラスで過ごしていた。担任の保育士は、前年度の2歳児クラスからの持ち上がりの1名と、前年度は担任をもたないフリーの保育士として子どもたちに関わっていた1名の計2名であり、いずれも女性保育士であった。3歳児クラス（2008年度）、4歳児クラス（2009年度）ともにこの2名が担任であった。

子どもたちの1日の過ごし方は、9時半ごろから朝の集まり、その後は制作や散歩などの設定保育を行い、11時半ごろから昼食、1時から3時ごろまでが昼寝、その後おやつを食べ、4時半ごろから帰りの集まりとなっていた。昼食の前後やおやつの前後に、それぞれ30分ほどの自由遊びの時間が設けられていた。

観察期間 第1期（2008年5月、6月）、第2期（2009年3月、5月）の各時期2日ずつ、9:30～17:00に保育場面に参加し、観察を行った。

観察手続き 観察者は筆者であり、観察期間に入る前の2008年3月に前もって1日保育に参加し、子どもたちの顔と名前を覚えた。また観察期間中も、観察時間外の昼食やおやつの時間を子どもたちと共に過ごすことにより、子どもたちから自然に認識される存在であった。

観察対象となる自己主張行動を、「自己の目的達成のために相手に言語的に働きかけること」と定義し、この行動が生起したときの状況、自己主張の形態、受け手の反応という3つの側面からフィールドノートに記入した。

結果と考察

分析は、「仲間同士の言語による自己主張行動」を対象としたため、保育士や観察者に対する自己主張行動や、言語を伴わない自己主張行動（無言で、相手をたたき、相手の持ち物を奪う）は分析対象に含めなかった。また、自己主張の与え手と受け手が1人対1人である場合のみを分析対象とし、1人の与え手から複数の受け手に対する自己主張、また複数の与え手から1人の受け手に対するエピソードは除外した。それらをふまえてフィールドノートから抽出されたエピソードのうち、エピソード開始後にはじめて生起した自己主張行動と、それに対する相手の最初の反応を1単位として分析を行った。

第1期（3歳時点）に観察されたエピソードは28個であり、自己主張の与え手となったのは13名、エピソード生起時の平均年齢は3歳8カ月であった。また第2期（4歳時点）に観察された自己主張のエピソードは28個であり、自己主張の与え手となったのは16名、エピソード生起時の平均年齢は4歳5カ月であった。

1. 自己主張の種類

自己主張が生起した状況を分類した結果、3種類に分けることができた。第1に相手に何らかの行為を促すものである「要求」であり、3歳時点では12例（43%）、4歳時点では7例（25%）観察された。第2に相手が継続中の行為、またはこれから行おうとしている行為を止めようとする「拒否」であり、3歳時点では12例（43%）、4歳時点では13例（48%）観察された。第3にすでに行われた相手の行為を非難する「抗議」であり、3歳時点では4例（14%）、4歳時点では8例（28%）観察された。

年齢的な特徴では、抗議状況の観察数が3歳時点よりも4歳時点の方が多い傾向があった。これは、抗議状況は相手がすでに行った行為に対して異議を唱えるものであるため、記憶や興味の持続が関わってくるため、年長の子どもにより現れやすかったと考えられる。

2. 言語表現にもとづく分類

それぞれの自己主張行動の言語表現にもとづき下位カテゴリに分類したものを表1に示す。拒否状況と抗議状況は、言語表現の面ではほぼ同一のバリエーションとなったため、2つの状況を合わせて示した。また、3歳時点、4歳時点における各下位カテゴリの観察回数を表2に示す。

表1 言語表現にもとづく分類と定義

分類		定義と具体例	
要求	提案	「○○しよう」など自他共同の行為を促す	
	依頼	「○○して」など相手に行為を促す	
	許可の要請	「○○していい？」など相手の許可を求める	
拒否・抗議	欲求	「いや」などの気持ちの表出	
	禁止	「だめ」など相手の行為を止めようとする	
	間接	疑問	「なんで○○するの？」など疑問形での抗議
		現状	「○○できない」など自己の現状を訴える
結果		予想される結果に言及する	

表2 各表現カテゴリの観察回数

	3歳	4歳
要求(合計)	12	7
提案	2 (17%)	1 (14%)
依頼	9 (75%)	4 (57%)
許可の要請	1 (8%)	2 (29%)
拒否(合計)	12	13
欲求	3 (25%)	1 (8%)
禁止	7 (58%)	4 (31%)
間接	2 (17%)	8 (61%)
抗議(合計)	6	8
欲求	1 (17%)	4 (50%)
禁止	2 (33%)	2 (25%)
間接	3 (50%)	2 (25%)

表2より、3歳時点、4歳時点ともに、多様な表現がみられることがわかる。拒否状況では、3歳時点と4歳時点で異なる傾向があり、3歳時点では「欲求」や「禁止」などの直接的な表現が多いのに対し、4歳時点では自己の現状を訴えたり、予想される結果に言及したりする「間接」が多い傾向があった。具体的には、エピソード1に見られるように、相手の不快な身体的接触に対しても、単に、「いや」とか「だめ」と言うのではなく、起こり得るネガティブな結果に言及することにより、相手の行為をとがめ、再び同じような行為をとらないようにしていることがわかる。

エピソード1 (4歳)

Y (女児) が歩いていると、後ろから A (女児) が来て、Y (女児) の背中をつつく。Y は急に背後から接触されたことに驚いた様子で A に、「こけたらどうするん? いたいでしょ」と言う。

3. 言語表現と行動の有無の関連

次に、これらの自己主張行動が言語反応単独で生じたのか、あるいは手で相手をさえぎる、相手の持っている物を奪うといった行動を伴うものであったのかを表3に示す。

表3 表現カテゴリと行動の有無の関連

	3歳		4歳	
	行動あり	行動なし	行動あり	行動なし
要求	2	10	1	6
拒否	7	5	5	8
抗議	0	4	0	8
合計	9	19	6	22

表3より、要求状況、抗議状況よりも拒否状況において身体行動を伴った自己主張が生起する頻度が高いことがわかる。エピソード2に見られるように、拒否状況は、相手が行っている行動を止めるものであるため、身体的接触を伴いやすく、結果としていざこざにもなりやすいと考えられる。それに対して、要求状況はこれから行う行動について、抗議状況はすでに行った行動についての自己主張であるため、身体的接触を行にくいと考えられる。3歳時点と4歳時点で、身体行動を伴った自己主張の観察される頻度そのものには明確な違いが見られなかった。

エピソード2 (3歳)

園庭で数名が砂遊びをしている。J (男児) がスコップを置いて水をくみにいっている間に、R (男児) がスコップを使い始める。J、「だめ、Jの!」と言い、奪い返す。Rは呆然とした様子で立ちつくしている。

4. 自己主張の結果にもとづく分類

自己主張に対する相手の子どもの反応を、状況別に下位カテゴリに分類したものを表4に示す。要求状況と拒否状況は、相手の反応の面ではほぼ同一のバリエーションとなったため、2つの状況を合わせて示した。また、3歳時点、4歳時点における各下位カテゴリの観察回数を表5に示す。

表 4 自己主張に対する相手の反応の分類と定義

分類		定義と具体例
要求・拒否	応諾	要求・拒否に応じる意思を積極的に表明する
	無抵抗	要求・拒否に応じる意思を積極的に表明しないが、結果的に要求・拒否が通る
	抵抗	要求・拒否に応じない意思を積極的に表明する
	無視	要求に対して応答しない
抗議	弁解	抗議された行動の正当化
	謝罪	抗議された行動についての謝罪
	無反応	抗議に対して応答しない

表 5 各反応カテゴリの観察回数

	3歳	4歳
要求(合計)	12	7
応諾	6 (50%)	2 (29%)
無抵抗	0 (0%)	1 (14%)
抵抗	1 (8%)	4 (57%)
無視	5 (42%)	0 (0%)
拒否(合計)	12	13
応諾	0 (0%)	4 (31%)
無抵抗	5 (42%)	2 (15%)
抵抗	4 (33%)	5 (39%)
無視	3 (25%)	2 (15%)
抗議(合計)	4	8
弁解	1 (25%)	3 (38%)
謝罪	0 (0%)	1 (12%)
無反応	3 (75%)	4 (50%)

表 5 より、3 歳時点と 4 歳時点の違いとして、要求状況で、主張者の要求に応じることを積極的に表明する「応諾」は 3 歳時点、4 歳時点どちらも同じぐらい観察されたが、要求に応じない場合には、3 歳時点では「無視」、4 歳時点では「抵抗」が多い傾向が見られた。また、拒否状況でも、3 歳時点では、「無抵抗」、「無視」といった消極的な反応が多いのに対し、4 歳時点では、「応諾」、「抵抗」、のように、相手の主張を受け入れること、または受け入れないことを積極的に表明する反応が多い傾向にあった。

エピソード 3 のように、3 歳時点では主張者の要求に相手が応じない場合には、何の応答もしない、という場合が多く、結果として主張者が要求を通すために、身体的手段を用いたり、保育士など第三者の介入を必要とすることになりやすい。

エピソード3 (3歳)

園庭で保育士が苗を植えるところを子どもたちが見ている。O (男児) が前にいるK (男児) に体を寄せて、「どれ、見せて」と言うが、KはOに応答しない。Oは、なんとかして前に出ようとするが、なかなか出られない。

一方で、エピソード4に見られるように、同様に場所の占有をめぐる自己主張のエピソードであっても、4歳時点では相手も自分の言い分を述べることによって、言語的なやりとりにつながるケースが比較的多い。

エピソード4 (4歳)

部屋で子どもたちが壁際に座っている。角に座っていたE (男児) が立ち上がってしばらくすると、S (女児) がその場所に座る。Eが戻ってきて、「ここ、Eくんの!」と言う。しかし、Sも「Sが先(に座っていた)」と言って動こうとしない。しばらく、言い合いが続くが、最終的にEが「まあいいわ」と言って、他の場所に座る。

このように、相手の反応に対して再び主張者が、再要求、応諾、弁解などを行い、自己主張エピソードが継続する事例が、3歳時点では2例であったのに対し、4歳時点では7例あった。つまり、3歳から4歳にかけて、言語のみの自己主張が増加する原因は、自己主張の与え手だけでなく、受け手が与え手の主張に対する意思表示を明確に行うことにより、与え手にとっても言語的主張を誘発しやすい状況になるのではないかと考えられる。

まとめと展望

本研究は、自己主張行動が身体的なものから言語的なものへと変化する、3~4歳児の自由遊び場面を縦断的に観察し、自己主張の与え手と受け手の両面から発達の特徴を検討するものであった。エピソードの分析結果より、自己主張の与え手については、3歳時点よりも4歳時点の方が、間接的表現を含む多様なバリエーションを示すことがわかった。また受け手についても、3歳時点よりも4歳時点の方が、主張者の要求や拒否を受け入れるか否かを明確に表出することがわかった。それによって、自己主張的やりとりが継続しやすくなることがわかった。

本研究は、乳児期の先行研究(川田・塚田・城・川田, 2005; 坂上, 2002)や、就学前児の先行研究(高濱, 1995)と同様に、3歳から4歳にかけての行動を伴う自己主張から言語のみでの自己主張への変化もまた、個人の認知能力や言語能力の発達だけでなく、自己主張の与え手と受け手の両者がダイナミックに変化することによって生じるとすることを示すものであった。

本研究は3~4歳児の自己主張行動について幅広くエピソードを収集するために、厳密な統制をしない自然観察を行ったが、今回の観察によって得られた結果が客観性のあるものであるかを量的に検

討することが今後の課題である。

引用文献

- Delty, R.H. (1979). Children's action tendency scale : A self-report measure of aggressiveness, assertiveness, and submissiveness in children. *Journal of counseling and clinical psychology*, **47**, 1061-1071.
- 濱口佳和 (1994). 児童用自己主張尺度の構成. *教育心理学研究*, **42**, 463-470.
- 川田 学・塚田一城みちる・川田暁子. (2005). 乳児期における自己主張性の発達と母親の対処行動の変容 : 食事場面における生後 5 ヶ月から 15 ヶ月までの縦断研究. *発達心理学研究*, **16**, 46-58.
- 丸山 (山本) 愛子. (1999). 対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略に関する発達の研究. *教育心理学研究*, **47**, 451-461.
- 坂上裕子. (2002). 歩行開始期における母子の葛藤的やりとりの発達の变化 : 一母子における共変過程の検討. *発達心理学研究*, **13**, 261-273.
- Shantz, C.U. (1987). Conflict between children. *Child Development*, **58**, 285-305.
- 高坂 聡 (1996). 幼稚園児のいざごごに関する自然観察的研究 : おもちゃを取るための方略の分類. *発達心理学研究*, **7**, 62-72.
- 高濱裕子 (1995). 自己主張タイプ児の遊びをめぐる交渉の発達. *発達心理学研究*, **6**, 155-163.
- 山本愛子. (1995). 幼児の自己調整能力に関する発達の研究—幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について—. *教育心理学研究*, **43**, 42-51.

謝 辞

本研究を行うにあたり、保育場面の観察にご協力をいただきました保育園の先生方と園児の皆さまに感謝を申し上げます。

